CLILを取り入れた日本語授業における学習者の学びについての一考察:「文化」をテーマにした素材を通して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00057318

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

CLIL を取り入れた日本語授業における学習者の学びについての一考察
―「文化」をテーマにした素材を通して―

深川　美帆
金沢大学国際機構
mihofk@staff.kanazawa-u.ac.jp

要旨

CLIL を取り入れた日本文化・社会をテーマに学ぶ上級レベルの日本語コースにおいて、地域の歴史遺構である「辰巳用水」をテーマとした授業実践を行った。授業後の課題やアンケートなどを分析し、学習者にどのような学びがあったかを考察した。その結果、地域の文化や歴史に対する理解の深まりや、高次の思考への深まり、学習方法への新たな気づきなどが観察され、多様な学習活動に取り組む中で、文化への理解を深めた様子が窺えた。

【キーワード】　CLIL、言語学習、文化、歴史、専門家との協働

1　はじめに

言語習得の過程において、その基底にある文化への理解は切り離すことはできない。私たちは、目標言語を習得していく中で、その言語が使用される社会の仕組みや文化的特徴に接触しながら、言葉の使い方やコミュニケーションの仕方を身につけていく。また、言語学習において、目標言語が使われる社会の文化は、言語学習の動機の大きな部分を占めている。日本語を学ぶ学習者の例を見ても、例えば、伝統文化や、ポップカルチャーへの興味・関心が、日本語学習の動機づけになっていることが少なくない。また最近では、学んだ日本語力を生かして日本社会で日本人と働く人も増えてきているが、その際に必要となってくるのが、言語能力と並んで日本社会や文化への深い理解である。筆者は、目標言語の社会や文化をより言語学習の中心に据えた言語学習の形を具現化するものとして言語教育アプローチの 1 つである CLIL に着目し、教育の実践に取り入れることにした。

2　CLIL（内容統合言語学習）

2.1　CLIL とは

CLIL （Content and Language Integrated Learning、内容統合言語学習）とは、理科や社会などの一般教科や、経済学や物理といった専門科目の内容と、第二言語（外国語）を同時に教えることにより、両方の知識と能力を習得することを目的とした言語教育の方法である。内容を、目標言語を用いて学ぶことにより、効率的かつ深いレベルで修得し、また目標言語を学習手段として使うことで実践力および学習スキルの育成も意図されている（池田 2011: 12）。CLIL の特徴は、Content （内容）、Communication（言語）、Cognition（思考）、Community（協学）の 4 つの C から成る構成要素を有機的に組み合わせて、言語教育の質を最大限に高めようとする点にある（池田 2011: 5）。まず学ぶ内容（Content）があり、それを表現し他者に伝える手段として言語（Communication）がある。伝える内容について考え、コミュニケーションすることで、他者との関わり（Community）が生まれ、それにより思考（Cognition）が刺激され、広がりと深まりを増すと言われている（和泉 2016: 76）。

2.2 日本語教育における CLIL の先行研究

CLIL は、特にヨーロッパにおいて、2005 年に欧州理事会がＥＵ加盟国に CLIL を取り入れるよう薦め[xvi]、2008 年の調査では CLIL はほとんどのヨーロッパの言語教育に組み込まれていると報告されており [2]、様々な言語において既に多くの実践がなされている。一方、日本語教育においては、CBI（Content-Based Instruction, 内容中心指導法）といった他のアプローチや、CLIL の中で取り入れられる協同学習（ペアワークやグループ）などの学習形態などに比べると、CLIL そのものについては注目されはじめてからまだ日が浅く、教育現場においてその実践が取り入れられたのは最近になってからである。これまでの日本語教育における実践研究としては、例えば、佐藤・奥野（2017）は、上級日本語学習者を対象に「貧困問題」をテーマにした CLIL の授業実践を報告している。宮島（2017）は、日本の大学の法教育センターでの日本語教育と法教育を CLIL で行った実践について報告している。また、日本国外では、上級日本語学習者を対象にドイツの歴史的背景と日本語教育を CLIL で行った村田（2017 a）、村田（2017 b）がある。これらの実践では、いずれも上級レベルでの報告が多いが、奥野・呉（2019）では、初中級クラスにおける CLIL において、学習者の言語的・認知的負担を考慮した活動を取り入れた実践の報告をしている。

3 本研究の目的と方法

筆者は、2017 年から担当する上級レベルの日本語クラスで日本社会・文化を内容とした CLIL を取り入れた日本語の教育実践を行っている（深川ほか 2018）。本稿では、特に文化をテーマとした言語学習において、学習者にどのような学びや気づきがあったかに焦点を当て、考察する。

3.1 授業実践の概要

3.1.1 対象者と学習目標

対象者は、金沢大学の全学留学生を対象とした「総合日本語プログラム」の上級クラスの学習者である。学習者の大学における専門分野は様々であり、属性も、正規の大学院生や研究生、半年または 1 年の短期交換留学生など多様である。母語や出身国も多岐にわたり、漢字圏、非漢字圏の学生がほぼ同じ比率でいる。1 クラスの履修者数は 18～25 名前後で、年齢は全員 20 代前半である。このクラスの学習目標は、日本社会や文化についての様々なテーマを通して日本語を学ぶことで、日本社会や日本文化についての理解を深めるとともに、日本の大学で学習・研究を遂行するための日本語力を身に付けることである。

3.1.2 テーマと素材

本稿で報告するのは、このクラスで学ぶテーマの 1 つで、特に地域の文化や歴史を主題とした課についての実践である。テーマとして取り上げたのは、大学が所在する地域の歴史遺構「辰巳用水」である。辰巳用水とは、江戸初期に旧加賀藩において金沢城の防火や防御のために造られた用水であり、現在も農業用水や市内を潤す環境用水として活用されている国指定史跡である。このテーマを選定したのは、辰巳用水の築造には、歴史的背景、科学技術、地理的要因など、さまざまな分野が関わり合うことから、学習内容、学習活動の多様な方向への発展が見込めると考えたためである。また、辰巳用水の築造の経緯については、現存する歴史的資料が少なく、いまだ謎が多いといわれていることから、学習者自身が考え、調べるといった学習活動の素材としても適していると考えた。この辰巳用水

をテーマに、この課では、現代の日本社会につながる歴史および学習者が住む地域についての理解を深めることを目的とした授業をデザインした。授業時間数は、一学期間（90 分×48 コマ）に扱う全 8 課のうちの 1 課（5〜6 コマ）である。授業は筆者を含め 3 名の日本語教師と、辰巳用水の専門家である本学教員 1 名の協働により行った。

3.1.3　内容と言語の統合

CLIL を取り入れた授業を組み立てるにあたり、専門家（内容）と日本語教師（言語）との協働は欠かせない。この授業においても、辰巳用水の築造に関する内容のテキストを教材化するにあたっては、辰巳用水について研究している専門家（本学教員ら）が一般向け公開講座のために発表した資料をもとに、日本語教師（筆者ら）が学習者の日本語力に応じた語彙・表現を用いて文章を書き下ろし、さらにその内容や文言について専門家に確認してもらうなどのやりとりを複数回行って完成させた。さらに、この課の最後の 1 コマの授業では、この専門家を授業に招き、学生との質疑応答や実験に協力してもらった。

3.1.4　授業の流れ

辰巳用水をテーマにした課の各回の授業の流れを図 1 に示す。授業では、まず、上述のテキスト化した文章で、辰巳用水についての内容理解と語彙、表現の言語学習を行った。この内容理解の過程においては、ペア・グループなどの協働学習や、学習活動中の学習者の産出に見られた不正確な語彙・表現を教師が取り上げてフィードバックを取り入れた。また、背景知識、理解を助けるために文字以外のレアリアや視聴覚資料も提示し、CLIL で高い次元の学習効果をもたらす上で重視されるオーセンティックで多様な素材を活用した。

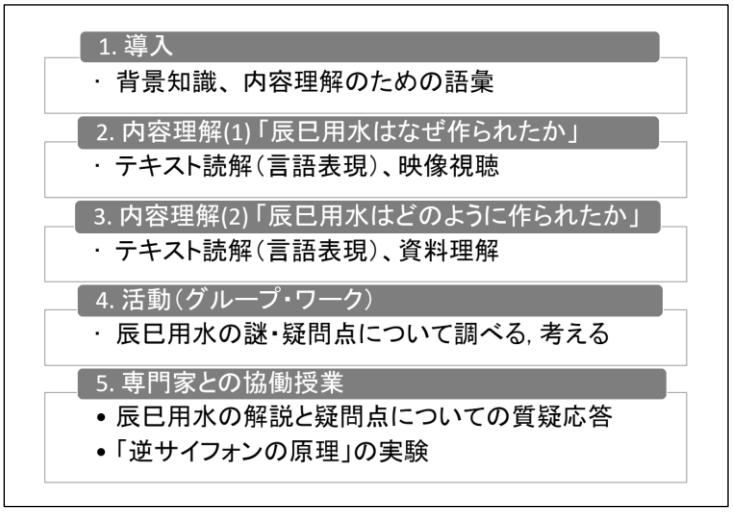

図 1　「辰巳用水」の授業の流れ

3.2　分析方法

本稿では、2017 年から授業に取り入れている「辰巳用水」の課の学習を通して、学習者が日本語および日本文化・社会についてどのような学びがあったかを分析する。

3.2.1　対象者

調査の対象とするのは、2017 年秋学期から 2018 年秋学期までの 3 学期（1 学期は半年）に学んだ日本語学習者 50 人である。日本語力は上級（JLPT N2 相当かそれ以上）で、国籍の内訳は、中国(24)、ベトナム(5)、台湾(5)、インドネシア(3)、タイ(3)、ドイツ(2)、トルコ(2)、ポーランド(2)、韓国(2)、アメリカ(1)、モンゴル(1)で、性別は、男子学生(12)、女子学生(38)である。属性や専攻は上述 3.1.1 で述べたとおり、多様である。

3.2.2 データ

分析対象は、課の最後に行ったアンケートの回答、課題の記述、授業でのコメントである。アンケートの質問項目は、1) 教材の内容の理解度（5 段階で回答）、2)専門家の話の理解度（5 段階で回答）3)教材・授業以外の資料の参照の有無（記述）、4)この課の学習を通して、新しく知ったこと・気が付いたこと、考えたこと・思ったこと（記述）である。

4 結果と考察

4.1 内容・言語の理解度

まず、テーマである辰巳用水について理解するための言語的素材である日本語テキストの日本語の難易度については、難しかった（16%）、少し難しかった（39%）、易しくも難しくもない（45%）という結果から、使用されている言語表現に難しさを感じている学習者とそれほどまでではない学習者がいることがわかった。次にテキストの内容について、どの程度理解できたかについては、難しかった（20%）、少し難しかった（27%）、まあまあ理解できた（36%）、少し難しかった（7%）、難しかった（9%）と、おおむね理解はできているものの、全体的には難しいと感じている割合が高いことがわかった。次に、内容の理解を助けるために授業中に提示した視聴覚素材は理解の助けになったかについては、助けになった（65%）、少し助けになった（35%）で、これら視聴覚資料が学習者の内容理解を助けていることがわかった。最終回での専門家の話の理解度については、よく理解できた（12%）、理解できた（38%）、まあまあ理解できた（50%）という結果から、専門家との協働による講義も全体的には理解できていること、専門家の話の内容に関する課題の質問への解答からも、話の要点は全体的によく理解できていることが確認できた。また、学習者が与えられた教材・授業時間以外に自発的にどのようなリソースにアクセスしているかをたずねた結果、約半数の学習者がアクセスしたと回答していた。具体的には、ウェブサイトが最も多かったが（21 人）、身近な日本人に質問する、映像や文献を参照する、実物（辰巳用水）を見に行くなど、多様なリソースにアクセスしている学生もいた。

4.2 学習者の学び

以下、アンケートや課題の記述回答から、学習者にどのような気づきや学びがあったかを質的に見ていく。まず、挙げられるのは、地域の文化への理解の深まりである。留学生である学習者らは、通常、自分の専門分野や趣味でない限り、自分の暮らす地域の歴史や文化についてはそれほど知らないままである。しかしこの授業を通して、そこから一歩理解が進んでいることが窺える。中には、自発的に文化施設に足を運ぶ学習者もいた。

(1) 「この授業の前に、三度兼六園に行ったが、当時、ただ秋と夜と雪化粧した兼六園だけある風景をみた。今度の授業に入り、金沢城の歴史と辰巳用水の背景を知り、四度目兼六園を訪ねた時、もっと吟味することができた。」 （17a-11）[3]

(2) 「学習の前にもう兼六園と金沢城へ行きましたけど、辰巳用水については全然知りませんでした。学習に通じて、辰巳用水建築の背景、方法、役割又は現在の生活への影響などが分かってきました。概して言えば、辰巳用水は天才的な偉業と思います。その上、江戸幕府と加賀藩についての歴史も前より詳しくになります。前田家に対する興味を持っているので、今週は前田土佐守家資料館へ行って、勉強になりました。」（18a-12）

歴史遺構を通して、過去と現在の自分たちの生活とのつながりに気づいたり、過去の先人の知恵と技術と現在の自分たちの生き方を対照し、思考している様子も見られた。

(3) 「辰巳用水は元々火災を防衛して、お城を守るために作られましたが、今まで私たちの生活に役に立っていて、金沢市の観光景観になりました。」（18a-15）

(4) 「昔の人は多分今の人と違って、世の中に存在するものに正確に認識していないかもしれない。しかしそれでも、自然の力をうまく運用でき、自然と平和に生きていた。逆に今の人は、効率的な仕事を求めてばかりに、その自然を壊す。これは進化か、若しくは退化か、どっちでしょうか。」（18s-10）

CLIL の 4C の 1 つである思考（Cognition）の深まりについても、内容の理解からさらに進んで、分析、評価（判断）といった高次の思考スキルに至っていることが観察された。

(5) 「辰巳用水」はクエストみたいで、何故板屋が作った用水遺跡はこの形のかな？板屋は何の難点をあったのかな、そうじゃないとここはこうする必要はないだろうって。これらのアイデアは授業中何回も繰り返して本当に楽しかった。」（17a-12）

CLIL では学習スキルの育成も目指しているが、学習方法や学習ストラテジーへの新たな気づきがあったことを示すコメントも観察された。

(6) 「そして、勉強方法についても新しい発見がある。以前からずっと『テキストを読みながら知らない単語を調べる』という勉強方法をやっていた。しかし、今回の授業はテキストを何度も読んでも分からない特別な存在である。ただし、ビデオやウェッブサイトや先生がやった実験のおかげてやっと分かった。すなわち、教科書にこだわらずに他の方法も一緒に使うのも大事なことである。」（18a-17）

このように、素材としての難易度はやや高めだったものの、学習者は授業での多様な学習活動に取り組む中で、理解と思考を深めた様子が窺えた。

5　今後の課題

CLIL を取り入れた言語学習を行う上で、いくつかの課題も明らかになった。1 つ目は、テーマとそれに付随する語彙の扱いである。特に、CLIL のように内容学習が言語学習と同じウエイトを占め、テーマが専門性の高いものになると、その内容理解のために必要な語彙が相当必要になってくる。自分の専門分野とは違ったり、テーマに感心がない場合には、語彙の理解に困難を覚えたり、学習意欲を失う学習者もいる。学習者が覚えるべき語彙と内容理解のための語彙を区別して提示するなどの授業での工夫が必要である。2 つ目は、CLIL を取り入れた授業の設計と教材作成の進め方である。これまでにも指摘されているように、CLIL の授業を実施するには、その準備に多くの時間とエネルギーを要する。また内容の正確さも保証されていなければならず、言語教育専門の教師が自分の専門分野以外の内容を扱うのは容易なことではない。今回の専門家との協働の試みをもとに、他の学術分野の素材についての手法を確立していくつもりである。3 つ目は、言語習得を促進する学習活動の工夫である。従来の文法積み上げ式の日本語教育では、まず教えるべき文法や表現ありきで授業が構成されるが、CLIL のように、内容とともに言語を学ぶアプローチでは、学習活動の様々な局面で言語習得を促進するよう、例えば、言語の意味と形式に注目するフォーカス・オン・フォーム（focus on form）の手法を取り入れた授業デザインなども考えていく必要があるだろう。

今後は、これらの課題に取り組みつつ、CLIL を取り入れた日本語教育の研究や実践を重ねていくつもりである。

注.
[xvi] Coyle et al. （2010: 8）
[2] 笹島（2011: 49）
[3] 以下、この形式で記してある引用文は学習者の記述文（原文のまま）である。文の最後の（）内の数字は年度、記号は学期、ハイフンの後は学習者番号を表している。

＜参考文献＞

Coyle, Do., P. Hood, and D. Marsh. (2010) *C.L.I.L. Content and Language Integrated Learning*: Cambridge University Press.
池田真、渡部良典、和泉伸一（2011）『CLIL 内容言語統合型学習：上智大学外国語教育の新たなる挑戦　第1巻原理と方法』上智大学出版.
和泉伸一（2016）『フォーカス・オン・フォームと CLIL の英語授業 （アルク選書)』アルク.
奥野由紀子、呉佳穎（2019） 「CLIL 初中級クラスにおけるコースデザインの試み―言語・認知的負担への考慮―」、『2019 年度日本語教育学会春季大会予稿集』pp.547-552、日本語教育学会.
金沢大学公開講座「百万石を支えた辰巳用水」（2017.4.16～9.23）配布資料、金沢大学地域連携推進センター.
笹島茂（2011）『CLIL 新しい発想の授業 』三修社.
佐藤礼子、奥野由紀子（2017）「ライティング評価による内容言語統合型学習(CLIL)の有効性の検討:「PEACE」プログラムの実践を通して」、『第二言語としての日本語の習得研究』20 号、pp.80-97、 2017-12、凡人社.
深川美帆、敷田紀子、苗田　敏美（2018）「上級レベルの総合日本語クラスにおける CLIL を取り入れた授業実践とその課題―地域の歴史遺産をテーマとした事例をもとに―」、『日本語教育方法研究会誌』 24 巻 2 号、 pp. 108-109、日本語教育方法研究会.
宮島良子（2017）「名古屋大学法教育研究センターと CLIL 」、第 10 回大阪大学日本語研究協議会配布資料.
村田裕美子（2017a）「内容言語統合型学習による学習者の「内容面」と「言語面」の変化」、『日本語教育方法研究会誌 』24 巻 1 号, pp. 6-7 、日本語教育方法研究会.
村田裕美子（2017b）「社会につながる日本語教育:ナチスの歴史を題材にした内容言語統合型学習の一例」、『第 15 回ヨーロッパ日本研究協会国際会議予稿集』（電子版）